

『黑夜事变、その後の日常』

——黑夜事变終結から、数日後。あれほど騒がしかった夜が嘘だったように、ヨルファミリア本部には穏やかな時間が戻っていた。傷跡は残っている。壊れた壁。交換された窓。まだ包帯を巻いている者もいる。

それでも——10人は、今日もここにいる。

第1席 ヨル

「……………平和だねえ」

大食堂の一角にあるソファ。絶対最強の総帥は、そこで完全にだらけていた。戦場で見せた圧倒的な威圧感はどこへやら。クッションを抱きしめ、スマホを眺めながらゴロゴロしている。

「ヨル。紅茶、淹れたよ」

「ん、ありがと。まふい」



差し出されたカップを受け取る。黑夜事変を終えてから、ヨルは以前より少しだけ本部にいる時間が長くなった。理由を聞かれても、

「別に？」

としか答えない。ただ時々、全員がいることを確認するように部屋を見渡していることを——まふいだけは知っていた。

第2席 まふい

黑夜事変後、まふいの日課が一つ増えた。

「ヨル、怪我してない？」

「してないって」

「本当に？」

「今日それ聞くの五回目」

「……念のため」



ヨルの隣にぴったり座る。首元には、いつもの鍵付きの黒い
チョーカー。あの夜の記憶があるからなのか、最近は以前に
も増してヨルから離れようとしない。ヨルが立てば、

「どこ行くの？」

「冷蔵庫」

「私も行く」

「冷蔵庫くらい一人で行ける！」

「知ってる。一緒に行きたいだけ」

「……なら仕方ないか」

ちょっと嬉しそうなヨル。それを見たまふいも、ほんの少し
笑った。

第3席 レモン

「……………」



レモンは自室のベッドで枕を抱えていた。そしてスマホを開く。トムカスとのトーク画面。閉じる。また開く。閉じる。

「……いやいやいや！」

ベッドの上で足をバタバタ。黑夜事変で、危ない場面が何度もあった。だからこそ——生きて帰ってきた今になって、今まで誤魔化していた感情が妙に大きくなっている。《今日、暇？》入力。削除。《怪我、大丈夫？》入力。削除。

《筋トレばっかしてないで休みなさいよ》

「……これだ！」

送信。三秒後。既読。《心配してくれてありがとう》

「~~~~っ！！」

枕に顔を埋めるレモン。その日の戦闘力は変わらなかったが、枕への攻撃力だけ異常に上昇していた。

第4席 トムカス

「……98……99……100！」



室内訓練場。まだ身体の一部には包帯が残っている。

「よし。次は——」

ピコン。レモンからのメッセージ。トムカスの動きが止まった。《筋トレばっかしてないで休みなさいよ》

「……………」

口元がちょっと緩む。

「……休むか」

黑夜事変を経験してから、トムカスは以前より身体を大切にするようになった。理由は単純。次の戦いでも、生きて帰るため。そして——

「……また心配させるわけにもいかないしな」

誰に、とは言わなかった。

第5席 ゆーカス & 第6席 いんカス

「いんカス」



「なに？」

「暇」

「俺も」

「ゲームする？」

「する」

五分後。

「お前それズルだろ！！」

「仕様ですー」

「絶対許さん！」

「近い近い近い！」

ソファの上で肩をぶつけ合いながらゲームする二人。黑夜事変では命を預け合ったコンビだが、日常に戻ればいつも通り。……いや。少しだけ違った。

「なあ、いんカス」



「ん？」

「……あの時、戻ってきてくれてありがとな」

一瞬の沈黙。

「急に何？」

「忘れろ！！」

「照れてる？」

「うるせえ！」

「顔赤いぞ？」

「近いって！！」

結局、いつも通りだった。ただ以前より、二人の距離はほんの少し近くなっていた。

第7席 あめちゃん & 第8席 にゃんこ

中庭回廊。



「いい天気～」

あめちゃんが寝転がる。その隣で、にゃんこもゴロン。

「平和だねえ」

「ね～」

しばらく二人とも何も喋らない。風だけが吹いている。やがて、あめちゃんがぼつり。

「……怖かった？」

「黑夜事変？」

「うん」

「怖かったよ」

にゃんこは即答した。

「でも、あめちゃんいたから」

「……………」

「なに？」



「それ反則」

「え？」

あめちゃんが無言でにゃんこの腕に抱きつく。

「ちょ、暑いって！」

「知らなーい」

「離れてー！」

「やだー！」

笑い声が中庭回廊に響く。二人が欲しかったのは、大げさな勝利の祝福なんかじゃなかった。こうしてまた隣で笑えること。それだけだった。

第9席 ごま塩

「……………ゴマ」



キッチン。ごま塩は巨大な鍋と対峙していた。黑夜事変後、
ごま塩は考えた。——みんな疲れている。——自分に何がで
きる？その答えが、

「ヨルファミリア全員分の飯を作るゴマ！」

だった。三十分後。

「ごま塩、これ何？」

ヨルが鍋を覗く。

「カレーゴマ！」

「……黒いけど？」

「隠し味ゴマ」

「何入れた？」

「ごま」

「どれくらい？」

「いっぱいゴマ」



「いっばいって？」

「いっばいゴマ」

全員、沈黙。まふいが一口食べる。

「……………」

「どうゴマ？」

「ごま」

「成功ゴマ！！」

「成功なの！？」

ヨルのツッコミが本部中に響いた。

第10席 なっち

屋外訓練場。

「……もう一回！」



なっちは一人で基礎訓練を続けていた。黑夜事変。自分より遥かに強い仲間たちの背中を、何度も見た。悔しかった。でも——同時に、嬉しかった。目標がたくさんいる。

「次はもっと……役に立つ」

武器を握り直す。そこへ、

「休憩」

ヨルがスポーツドリンクを投げる。

「わっ！」

慌ててキャッチ。

「お姉様!？」

「頑張るのはいいけど、身体壊したら意味ないよ」

「……はい！」

ヨルはそのまま戻ろうとする。

「あの！」



「ん？」

「私……もっと強くなれますか？」

ヨルは少しだけ考えて——笑った。

「なるんでしょ？」

「……！」

「だったら聞く必要くない？」

なっちは強く頷いた。

「はい！」

その声は、以前よりずっと力強かった。

夜——ヨルファミリア本部

「ご飯できたゴマー！」

「またごま料理！？」



「今日は普通ゴマ！」

「その言葉が一番信用できない！」

「ヨル、こっち座って」

「まふい近いって！」

「レモン、顔赤くない？」

「赤くない！！」

「トムカスも赤くない？」

「気のせいだ」

「ゆーカス、肉取るな！」

「早い者勝ち！」

「あめちゃん、こっち！」

「はいーい！」

「おかわりありますか！」



「なっち食べるねえ!？」

笑い声。言い争う声。食器の音。黑夜事変では、何度も失いかけた光景。ヨルは騒がしい食卓の中心で、ふっと笑った。

「……うるさいなあ、ほんと」

まふいが横を見る。

「嫌？」

ヨルは答える。

「まさか」

そして——10人を見渡した。

「これがヨルファミリアでしょ」

戦うことだけが、彼らの物語じゃない。最強の総帥も危険な力を秘めた第2席も恋に悩む者も相棒と笑う者も強さを追いかける者も。そして語尾がゴマな者も戦いが終われば、同じ場所へ帰ってくる。黑夜事変後——



ヨルファミリア10名。

本日、全員生存。

そして今日も本部は、

とてつもなく騒がしい。

END

